鳥居清経画の草双紙（三）

――『神明遷宮生姜市最初』――

有働　裕

四、『神明遷宮生姜市最初』

（1）書誌

本書は『補訂版国書総目録』に、

神明遷宮生姜市最初（しんめいせんぐうしようがいちのはじめ）　画　㊀岩瀬（一冊）　類黄表紙　著鳥居清経

と記されているもので、『改訂日本小説書目年表』には記載がなく、『岩瀬文庫図書目録』に、

神明遷宮生姜市最初　鳥居清経画　一　和　（函）一〇二

（號）六三

と記されている。以下、本書の体裁を示す。

①表紙　原のもの。黄色。無地。一八・〇センチ×一三・〇センチ。

②題簽・外題　下巻のみ題簽が残る。一三・〇センチ×九・七センチの絵題簽で、外題は「神明遷宮生姜市最初（しんめいせんぐうしようがいちのはじまり）　下」。

③本文匡郭　一五・七センチ×一一・四センチ

④柱刻　上巻は「せうが市上　一」の体裁で一～五、中巻は「せうが市中　六」の体裁で六～十、下巻は「せうが市下　十一」の体裁で十一～十五。

⑤紙数　十五丁。

⑥画作者　十五丁裏に「清経画」とある。

⑦板元　下巻題簽の「いせ治」より伊勢屋次助。

⑧刊記　なし。

⑨広告　なし。

（2）写真版及び翻刻

翻字不能の箇所は□で示し、翻字が不確かであったり判読不能であるが前後関係から推定した箇所は〔　〕で示した。

（表紙）

鎮守府将軍八まん太郎源の
よしいへ公せんじをかふむり、おうしう
たけひら・いへひらきやうたいをうち
ほろほさんと、きん〳〵
しゆつちんまし〳〵ける。
家臣和田左衛門の尉
ためむね、天照
皇太神宮へ
きせいをかけ、
しばらくのつとを
上けるうちとろ〳〵と
まどろみ、むちう
に太神
宮あらわれ給ひ、わがちから
をもつてこのたびのおう
しうぜめ、せうりを
ゑさせん。かいちんあらば、武
さしの国芝いひくらに
（一丁表）

じんしやをたてまつり。

（一丁裏）

よしいへ公の給ふは、この度せんじをかふむり、おう
しうたけひら・いえひらをうちほろぼす事、
いつれもはたらき、きみのしんきん
をやすめたてまつれ。大やのみつとう
はらうねんなれば、あとをあいま□べし。
わた左衛門ためむね、
しらき

の三ほうに
太神宮の御はらいをのせ、うや〳〵しく
まかりいで、われ太神宮をいのりしところ、ふしきのれむを
かうむり候。このたびかいぢんまし〳〵て武州いゝくらへ
神社をこんりうせよとのしんちよくを
かうむり候、とあいのべける。　　みつとうか一子
しからばためむねがしんちよく　　大やのこれひろ・
にまかせ、此だひのかつせん　　かまくらの権五郎景政、
にはいづれもはたざほ　　いづれもおそるべきて
に太神宮のおはらいをつけ　　きは一人もなし。そのうち
へしとて、みな〳〵　　にもまだもてごはきは、鳥
はたざほへ　　のうみ也。あねむこなから
おはらいをつけらるゝ。　　くんの大てきわ、矢さきに
権五郎か弟、　　かけてほろほしておめにか
権六かけつら。　　けん。　　（二丁裏）

武ひらは、弟の家ひらか　まける　（二丁裏）
しん鳥のうみなどをよび、　事あるがいくさの
さてこのたびちんじゆふの　ならい。
しやうくんよしいへ、おう
しうへせめくだるよし、　かしんのざきぐん藤太、
きけは大ぐんときこゆ　わかだんなのあふせの
る。これ〳〵　ごとく一のきとて
あにじや人、
よしいへ大くんで　われ一人にて一やはなさば、さいこ
くだると　くせいはおそれて、よりつくことは
て、なに　なりませぬ。
ほとのこと　まるばし　つがもない事、〳〵。
ある　一かく。
べきなし。　まづかまくらの権五郎。こいつ
六十六ケごくの人が　めはつよいやつときく。
みなきても、おう州　ちとこれが
一こく半ぶんでもない。　こわもの、
こわいことはござらぬ〳〵。　〳〵。
鳥のうみ弥三郎きつとしあんし、いや〳〵比おうしうが
大ぜいなりとて、ちからにするはけがのもらい。大くんが
かつにさだまらす、小軍がまけるにきわまらず。ぐんほう
によつて小ぐんたりともかつことあり。大くんにても
（三丁表）

ちんじゆふ
しやうぐん□□
太郎義家あっ□
御しやていかもの次郎殿
けふいくさだち御しうぎ
あいすみ、御はたこと〴〵く御はらひ
をつけ、むさしのくにしばあかはねばしの
ほとり、いゝくらまてつき給ふ。御とものめん〳〵、
わだ左衛門尉ためむね・大屋の四郎これひろ・
かまくらの権五郎かげまさ・同権六かげつらなど、
われも〳〵といさみいさんで御ともす。
御大せういひくらにて、しばらく御きねんあり。めてたく
かいぢんしだい此ところへじんしやをこんりうし
たてまつらん、と御はい有ければ、ふしぎやしろき
くも一むらまひさがり、へいそく一つおちけり。
さてこそそのところへ御こんりうありけるとなり。

みな〳〵ありがたき事きもにめいじ、
一しんにはいれいし、
おうしうさして
くだら
せ給ふ。

（三丁裏）

（四丁表）

けふはたかいのたいちんなりと、みだい所（四丁表）
そのをのまへ、みな〳〵つぎ〴〵女中、ためむねが
女ぼうおきのと・かげ政か女ぼうはぎのと、
これひろか女ぼう花ます・みつとうか女ぼういざなみ、
てんでにおもひつきのしまたいをさし上、
御ぜんへいで、御たいぢんの御しうき
けふはみな　　の御しらきの御さかつきを
そろふて　　ちやうたいす。
これは〳〵。　みつとう　　今日との御たい
みつとう　　らうねん　　ちんめでたふけ□
らうしんのたい　なれは、　　まする。此たびのいく
き〳〵。　御るすい　　さは太神宮の御りやくにて、
やくをつと　　御しやうりうたがいなし。
むる。
はぎのと　　せがれこれひろめ、たけひら・いへ
さま、　　ひらきやうたいの
おさきへ。　　くびてもひつこぬけば、
よいが。あゝわれら
おきのとさま　　年よりたれば、御る
これは〳〵、　　すいばん。何につけても
さあ〳〵　　としのよるほどくちおしいものはない。
おかまいなく。　　はなます。（五丁表）

よしいへ　（五丁裏）
公の
ぢん
やに
ては、
みな〳〵
ぐん
ひやうの
べんとう
たきだし
それらに
いびつに
まげ物
をこし
らへ、
ふじは
つよきものなれば、ふじを忍がき、
べんとうをつめ、なかへはせうがを入。このせう
がはせいきをまし、きをつよくするものゆへ、
ぐん中のべんとうに用るなり。かくのことくにして、
みな〳〵ぐんびやうへくばるなり。
さあ〳〵、めしもできました。せうがをこしらへ
さつしやい。

奥州一の
きどに
出ばり
をし

このところは
軍藤太あいま
もり、ゆみてつほう
かさりたて、
いまやおそし
とまち
かけ
たり。

はやく
こい〳〵、
一やに
みせ
つけて
やるませう。

よしいへ
なん百万きで
あらふとも、こゝで
おれが一矢やらかす
と、みなばら〳〵とにげる。（六丁表）

よしいへ公の　　（六丁裏）
せんちんの　　ありがたや
大しやうは加茂　　あまてるかみの
の次郎殿、五千よき　　おかげ。
　　にて一のきど　　あめあられ
　　にせめかけ　　といかくる
給へは、まちもうけたる　　や、ことぐく
軍藤太、こゝ　　おれけるは。
をせんどゝゐかくる　　ハア〳〵。
矢あめのことく。
太神宮の御はらいの
ついたる白はたまつさきにたて、
せめかけ給へば、矢さき
　　ことぐくくそれてみかたに
　　あたらず。かげ政が弟権六
　　かげつら、大やの
　　これひろ、まつさきにすゝみ、なぎ
　　たつれば、あたりによりつくものも
なく、軍藤太くちにもにやはず、　　おれはかう
三のせきまでひきしりぞく。　　さんをせう。
一のきどは、かもの次郎かの　　きさまも
　　てにてやぶら　　はやく　　かうさん〳〵。
　　れける。　　にげろ。　　（七丁表）

たけひらいへひらは、源よしいへが（七丁裏）
どのやうにせめたりとも、何ほどのこと
あるべきと、きやうだいして
さかもりし、いく
さのちうしん　今日のいくさ
をすちいたり　軍藤太殿
一のきどを
かためられし
よしいへが　ところに
せんじんかもの次郎
と申小わかしゆ、それ□□したがふ
かまくら権六□けつら・大やの
四郎これひろとなのり、きりたて候。なか〳〵つらむけ
もならず。またみかたよりゐかくる矢さき、一矢にても
てきにあたらず、みなおれ又はそれ候。
ついに一のせきをやぶられ、二のせきへせめかゝり候、
とちうしんす。

これあにじや人、
これからわしがいって、
みなころしにしてやりませう。ぐん藤太
なぞかなんとして
どれ〳〵一トなぐりだ。（八丁表）

（八丁裏）

よしいへ公、二の
きどをせめかけ給へは、いへひら
大あらわになってかけたて〳〵、
四方八方なきたてけれは、
すこししらけてみへけるところへ、
かまくらの権五郎かげまさ、てつのぼうふりあげ、
なぎたて、うちひしぐ。おうしうぜい
こと〳〵ぐ
うたれければ、

あるいはにげ、又は
かうさんす。

いへひら
権五郎とわたりあい、
きりむすぶ。なにかは
もってたまるべき。　せうとく太子の　太神ぐうさま
あとをも　かいてうへまいっても　おたすけ
みずして　これはぐ□んが　なされ
にげうせけり。　きかぬそうた。　下さり
こゝにおいて　ませ。
二のせきもやぶれける。

（九丁表）

それより三のせきは、鳥の海
がぐんほうにて、うちより
ゆみてつほうを以てふせぎ
しばかり、うつていでず。とぢ
こもつてゐたりける。

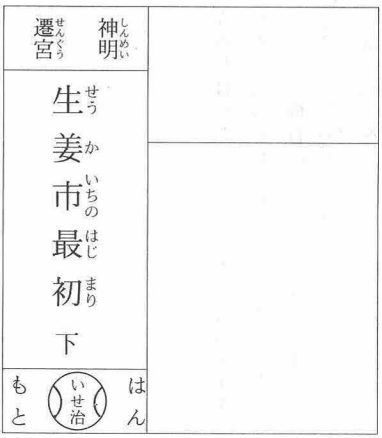
（九丁裏）

よしいへ公の
かたにて
は、ためむね
かげ政など、
ゆみてつほうにて
ゐ
たてける。
物みより鳥の海
きつ
と
みて、
権五郎を
めがけ、いろ
〳〵
つけ
ねらひける。

（十丁表）

こしもと若な、そのかもさまは市川団之介ニ　（十丁裏）
そのまゝありやらば、比わかなもほのじでござんす。おひめ
さまのこがれなさるもむり
はないァゝとふせふのふ。
鳥の海のむすめ小
いとは、かもの次郎かこと
ちらとみそめ、
こひしたひけ
れども、てきと
てきとのことなれば、ちか
よることもならず。こが
れ〳〵てついにむなしく
なるぞ、ふびんなる。

こしもと
ども、いろ〳〵いさめる。



（下巻表紙）

鳥のうみがはかりことにて、大きなるくまをとりよせ、
てきぢんへはなしかければ、きばをならし
とびかくる。権五郎ことゝもせず、くまと
くみ合、とつてなげのけ、御
はたの御はらいをとり、
くまにさし
かげ〳〵もみ
合ければ、さしも
にたけきくまもをく
たれ、かうべをうなだれ、
権五郎がそばへうづく
まりしが、おうしうぜい
をめがけ、一さんに
たけりとひかゝる。
あゝこれ〳〵、くまどのやくそくかちがつた。
（十一丁表）

三の木戸まて　　（十一丁裏）
にあやうくみへければ、
鳥の海の弥三郎
友つなふせきける。
権五郎かけ政、ゑんじやなれとも大てき、
めにものみせんとかけくるを、
鳥の海五人はりに十五そく
きり〳〵とひきしぼり、ひやう
どはなつ。権五郎が左りのまなこに
はつしとたつ。かけ政ことゝもせず、につ
くき鳥のうみと、とうの矢をゐかへし
ければ、友つなが右のもゝへはつしとたつ。どつか
とざしけるをとびかゝつて、ついにくびをとる。

弥三郎うたれければ、たけひら・いへひらきつて
いでければ、ためむねいへひらか両そくをかなぼうにて
なぐりたをしける。これひろとつてをさへ、なをかくる。
たけひらはやしやのあれたることくかけまはれば、ふしぎや
御はたの御はらいよりくわうめうかゝやけば、たけひらは
五たいすくみ、まなこくらみければ、和田左衛門為宗・
かげまさとつておさへ、くさりをもつてしばり、
かちどきどつとあげけるは、めでたかりける次第也。
（十二丁表）

かくて、たけひらいえひらばしめおうしうぜい　（十二丁裏）
ことぐ〳〵くほろび、義いへ公かいぢんまし〳〵ける。又いくさ
のうち、いづれもせいをもみしよくもつもつねのごとくならず、
ひいそんじければ、おひたゝしくあまざけを
つくり、あつきをみな〳〵のみける。あま　　どふも
ざけはひゐをとゝのへ、うちをあたゝめ　　いへ
つかれをゆるぶものなれば、もち　　もつと　　ぬぞ、
ゆべきことゝかや。めでたきいかぢん　まいれ。　うまい
のじせつ、あまざけをたくさんに　　〳〵。
つくりてのみけるも、みよゆたかのもといとて、
いまにしんめいまつりにあま酒を
　　つくり、とり
あゝおれは　　やりする
しうしが　　とかや。　きついくすりだ。さあださ
ちがふ　　つしやい。
四方の　　しんじやう。
あかと　　さあ〳〵。
　でかけたい
　　はらだ。　　も一つのもふかの

こんどのいくさのやうなめでたいいくさはない。みかたに
一人でもけがといふがない。てうどしゝがりでもするやうだ。
おもしろいゝく〔さであった。〕　　（十三丁表）

よしいへ公、めてたくてうてきを　（十三丁裏）
ほろぼし、かいぢんまし〳〵候。
かねてしんちよくなれば、むさしの国芝赤はねの
ほとりにへいそくのおちし所へ、神宮を御こん
りう有ける。

芝赤はねのほうに
宮御こんりう
あいすみ、御しゆつ
ちんの〔ころ〕、うんちうより
おちしへいそくをしんへいになし
給ひ、しやりやうとうとさせ給ひ、
飯倉神社とあふぎたてまつりける。
ところは赤羽のほとりなりしが、寛永十一年に
みしま町へひけ、今此所を神明町と云。
御ぞうゑいあいすむまで
このところにまし〳〵
御せんぐう御ぎしき
とう御いとなみ
めでたく京とへ
御帰〔洛〕有ける。

（十四丁表）

御しやてい
かもの五郎。

ちぎ、
といや〳〵〳〵。
まけた〳〵〳〵。

おみやげ〳〵、
ちぎがあめか。

せうがをまけた〳〵〳〵。
そも〳〵神明宮さいれいに
ちぎをうり、せうがをうり
ける事、ちぎはめでたきかちいくさ
のべんとうの入もの。又せうがは、
せいきをまし、きりよくをつよくし
大しつよりれいきにうつる所の暑しつをしりぞけ、ゑき
れいをはらひければ、これをうるとかや。わけて神明
の御利しやうありて、あくじさい
なんをもまぬかれんと、人〳〵かいける也。
ちぎをかいてあめを入てみやげにするも、
へんとうのめしを入しためしなり。
されば まいねん九月十一日より
にき〳〵しき御まつりも、御りしやう
おゝき神明宮の
御しんとく也。

（十四丁裏）

（十五丁表）

あまざけも　（十五丁裏）
かちいくさ
のかいちん
にもちひ
しいわれ
にて、今
に此
神明の
御まつり
にやりとり
することも、このいわれ也
とかや。めでたきみよ
のためしなり。

清経画

（裏表紙）

〔付記〕今回は書誌・翻刻のみで解説は次回となりましたが、御批正御教示いただければ幸いです。

本稿を成すにあたり、資料の閲覧・翻刻・写真版掲載を御許可下さった西尾市立図書館岩瀬文庫の皆様に深謝申し上げます。

尚、本誌第四十八集所収の『ぎよらん』の翻刻について、

うつを→うつこと（P4上段19行目）

『宇治橋姫太平兜人形』について、

武ゐ→武将（P8下段15行目）

との御批正を鈴木重三先生より賜わりました。また、第四十九集所収の『小栗照千姫二葉草』の翻刻につきましては、

荘介の大でき→古今の大でき（P89）

との御批正を岩田秀行先生より賜わりました。末筆ながら厚く御礼申し上げます。